吟香会報

編集・発行
岸田吟香を語り継ぐ会
2024年1月1日
発　足
2020年4月1日
事務局
岡山県美咲町
山本登志夫
090-1015-2367

岸田吟香と私

岸田夏子（洋画家）

私は一九四〇年生まれなので、既に四十一年から始まる第二次世界戦争の予兆を感じる日々でした。

翌年から始まる戦争の激しさは日に日に増し、弟が生まれた四十五年の春には空襲の中逃げまどい、翌朝家に戻ると洋館風の建物の父の歯科医院も母屋も、同じ敷地内の従弟の家も丸焼けでした。

其の頃の誰もが経験をした第二次世界戦争です。

私達は母の父劉生のお弟子さんだった高岡市在住の住職さん（長福寺）を頼って疎開しました。そして三か月後に、日本海側の緩やかな山脈に囲まれた静かな山村の中で終戦を知りました。

戦争中も大変でしたが、その戦争で失ったものの大きさ、特に人命、働き盛りの男性は殆ど見架けられず、駅前には傷病兵と言われる怪我をした兵隊さんが白い傷病服を着、松葉杖を頼りに首から募金箱を下げ募金活動をしていました。

それから七十九年を経た二〇二四年新年を迎え皆様にお伝えしたい事、其れは戦争の悲惨、怖さです。私たちはその他二千年も続く大事な歴史の多くを失いました。

その中のたった一つの家族でしかない私達も、家族はバラバラになり、生活の場から、生活の必需品も全てなくしました。

ですから私が、今の世では考えられないでしょうが、曾祖父の事を知るのは大分たっての事、小学二、三年の頃になってからでしょうか、そのころ一緒に住むようになった、劉生の妻、祖母はしっかりした時でした。

私は子供の頃から家族で楽しんだ百人一首の中の得意札は「諸共に哀れと思え山桜、花よりほかに知る人も無し」でした。家族で行く多摩墓地の桜並木、入学式の晴れやかな日の学校に咲く桜、咲初めから、満開を迎え、風と共に散って行く。

時々吟香曾祖父は桜の何に魅かれたのかなと、桜を見ながら考えています。　完

岸田夏子略歴

和歌山県で生まれる。1963年東京芸術大学絵画科油絵専攻卒業し、1965年東京芸術大学大学院油絵専攻を修了する。1999年尾道白樺美術館館長、2000年清春白樺美術館館長を歴任し、2009年、学校法人鎌倉女学院美術顧問となる。資生堂ギャラリー、高島屋美術画廊、三越特選画廊、吉井画廊、ベルギー日本大使館、ベルギー王立音楽院などで個展を開催。現在「麗子の生涯」を執筆中。東京都在住。

新年あけましておめでとうございます

皆様には輝かしい新年をお迎えになられたことと存じます。

数年前から新型コロナウイルスの発生やロシアのウクライナ侵攻等による戦争が勃発し世界を激震させていますが、平和を願う私たちにとって、一日も早く終結してもらいたいものです。

会員の皆様、今年も岸田吟香を語り継ぐ会の応援をよろしくお願いします。

令和六年　元旦

会長 加原奎吾　副会長　草地浩典、
世話人 杉山健二郎、齋藤孝義、
甲元正美、坂手良亘、有木富喜、
青山　剛、赤堀浩一、光元正夫、
恒弘兵衛、山本宏治、岸田　惠、
杉山　稔、山本登志夫

E-mail:
kishidaginkou2020@gmail.com

「吟香&ヒコ　新聞との出会い」

武庫川女子大学・山口教授講演、播磨町長らを迎え

令和五年十月十四日、秋の新聞週間特別企画として日本初の民間新聞創刊「吟香&ヒコ」大講演会が行なわれ、約二〇〇人が聴講しました。

これは、山陽新聞社や兵庫県播磨町など後援を受けた吟香を語り継ぐ会が美咲町・同教育委員会と共催で行ったもので、会場となった旭町民センターは吟香の研究者や愛好者で埋め尽くされました。

当日は、播磨町から佐伯町長をはじめ播磨町ふるさとの偉人顕彰会、埼玉県からジョセフ・ヒコ記念会の堀会長、東京からも国際基督教大学の稲垣元教授や國學院大學の久野名誉教授らも駆けつけていただき、事前に生誕地や吟香苑も見学されました。

まず、主催者である加原会長が播磨町との交流の経過について挨拶、その後、青野美咲町長と佐伯播磨町長が対談しました。

両町長は、冒頭「吟香と美咲町」「ヒコと播磨町」について説明され、その後活発な意見交換が行われました。

佐伯町長が「朝ドラにならないか」と話すと、青野町長が、「いやいや大河ドラマ」と応えるなど一時盛り上がる場面もありましたが、最後は、今後も絆を深めましょうと固い握手で締めくくりました。

次に、武庫川女子大学の山口豊教授による講演に移り、日本で最初に「新聞誌」創刊に至った経過や吟香とヒコの関係、二人を結びつけた宣教師で眼科医のヘボンについて、吟香の性格についても話されました。教授は、以前アナウンサーを志したこともあり、その優しくて分かりやすい口調は、当時の様子がよく分かりました。

参加者の一人、美咲町から参加した森岡照幸さんは、「吟香の読みやすい記事は、山口先生の聞きやすい話し方に通ずるものがある」、また岡山市から参加した水本美加さんは、「町長同士の対談とは思えないほど楽しかった。これを機会に交流が続けられたらいいですね」などと話していました。

『「吟香翁」聖地を辿る　美咲町へ寄贈』

語り継ぐ会は、昨年十二月二十五日、町役場に於いて岸田吟香生誕一九〇年を記念したパンフ「岸田吟香翁聖地を辿る」を美咲町へ寄贈しました。

これは、岸田吟香記念館を訪れる方から生誕地等に行く地図がないかと聞かれることが多く、大講演会時、生誕地を巡った方々に渡した資料をもとに一〇〇〇部作成したものです。

当日は、黒瀬堅志教育長同席のもと加原会長から青野高陽町長に直接手渡ししました。

パンフレットは、美咲町旭文化会館に置いていますので、記念館を訪れる方は是非ご利用ください。

「覚えていますか」

NHK朝ドラ「らんまん」、昨年暮れで終りましたが、高知県が生んだ植物学者「牧野富太郎博士」の人生を描いたドラマ、四月二十一日放映の第二回内国勧業博覧会の一シーンに、「岸田吟香氏ノ公法會通発刊」のチラシが掲載されていました。

また、八月十七日ＯＨＫのバラエティ番組「私のバカせまい史」で、塩と唐辛子を掛け日本で最初に卵かけご飯を食したのは吟香。現在はバラエティに富んだ卵かけご飯があると・・・。

見ている人は見ているんだと感動しました。情報をいただいた皆さん有難うございました。

証言

榎本妙子（津山市）

現在、八二歳になる榎本さんに聞きました。

昭和三十年三月、丁度美智子妃殿下が結婚された年ですが、美作女学校（岡山県津山市）、現在の美作高校は、当時は一学年で一〇クラスもあったように記憶しています。

ある日、道徳教育の時間だったと思いますが、袴を履いた杉山卓校長先生が、講堂に立ち、美作地方には凄く偉い人がいたと話していたのを、みんな正座をして聞きました。その人の名は、久米郡旭町出身の岸田吟香翁であると言われたのを記憶しています。もう何十年も前の事なのでさらに詳しいことは忘れていますが・・・。と話されました。

美作女学校は、旭町出身の杉山宇三郎校長が創設したもので、卓校長は二代目の校長、二人とも岸田吟香のことを、我が郷土の偉人であることを後世に伝えようと女生徒に話していたものと思われます。

七月八日取材　甲元

母麗子生誕一一〇年展　開催

小規模ながらユニークなモマットコレクション展「母麗子生誕一一〇年展」を、次の日程で開催します。興味のある方、是非ご来場ください。夏子

日時　一月二三日～四月七日迄
場所　東京都千代田区北の丸公園三－一
　　東京国立近代美術館
電話　050-5541-8600

モマットコレクション展
館所蔵作品として、麗子がアトリエで過ごしながら描いた作品と劉生の麗子像などを展示する。

この会報は、令和5年度（2023）公益財団法人福武教育文化振興財団の助成金と会員の浄財（会費）を基に作られています。